

大高城と松平元康兵糧入武功の検証

原 史彦

キーワード

大高城 鳴海城 鷺津砦 丸根砦 正光山砦 水上山砦 蟹江城 花井備中守 水上姐子社主久米家 水野大膳家 水野正長 織田信長 服部左京進 『三河物語』 『信長公記』 『朝野舊聞褒貶』 『寛政重修諸家譜』 『寛永諸家系譜傳』 『徳川実紀』 『紹巴富士見道記』

はじめに

大高城（名古屋市緑区）は永禄三年（一五六〇）の桶狭間合戦の前哨戦の舞台となったことで著名な城である。通説的にいえば、今川義元方に寝返った鳴海城（名古屋市緑区）・大高城を包囲するため、織田信長はこの両城の周囲に砦を築いて包囲した。そのため、特に大高城への兵糧入が急務となり、当時松平元康と称した徳川家康が、義元の命で大高城への兵糧入を遂行、次いで包囲砦の一つ・丸根砦（名古屋市緑区）を攻略し、義元敗死後は冷静な判断で撤退を行い無事に岡崎へ帰還した。これが江戸時代から伝説的に讃えられている元康（家康）の武功である。

しかしながら、このことに関する二次史料での取り上げ方がまちまちで、異説も存在するため大高城兵糧入前後の状況を分かりにくくしている。また、大高城兵糧入が桶狭間合戦の直前なのか、別年なのかという疑義もある。定見をみないのは、桶狭間合戦に関する一次史料の不足はもとより、ことに家康の武功に関わる事項のため、二次史料における武功の盛り込み・創作があったことも要因の一つに数えられよう。

名古屋市教育局では、国史跡「大高城 附 鷺津砦 丸根砦」（一九三八年指定）の保存活用計画を策定するにあたり、筆者もオブザーバーとして会議に参加し文献調査を行った。本稿の目的は、まずこの過程で再確認された大高城の歴史を筆者の仮説を交えて紹介した上で、大高城兵糧入という元康の武功が、どのように享受・伝世され、変質したのかを明らかにすることである。

そのために、二次史料を中心とする大高城兵糧入伝承の検証を行った。対象とした史料は、幕府編纂の『朝野舊聞褒貶』「東照宮事蹟」第九（第十五）に収載される創業録や軍記等である。同書は文政二年（一八一九）起稿・天保十二年（一八四一）の完成で、天保十四年の『徳川実紀』と同時に完成であることから、少なくとも江戸幕府の歴史認識に影響を与えた書誌が収載されていると考えるからである。そして、『寛永諸家系譜傳』^②（以下「寛永傳」という。）及び『寛政重修諸家譜』^③（以下、「寛政譜」という。）を基に武家の家譜の検討を行った。家譜といっても二次史料である以上、必ずしも正確に史実を反映しているわけではないが、各家における桶狭間合戦前後期の武功認識を探ることができた。

最後に、大高城包囲網と紹介される機会が増えた水上山砦・正光山砦と、近年になって存在が提唱されたいわゆる「向山砦」（いずれも名古屋市緑区所在）について、その存否を含めて検証を行った。これらの砦群は、近年になって感覚的に桶狭間合戦に紐付けられた遺跡であり、史料の裏付けを持たない。桶狭間合戦時の状況を整理することで、これら

砦群の存在・実効性について検討を加える。

なお、桶狭間合戦に関する研究は数多く存在するが、本稿では先述の目的を第一義とするため、合戦自体の検証は行わない。よって、紙面の都合上もあり、合戦に関する先学の成果は割愛させていただくことを予めご理解願いたい。

一 大高城史の再検証（桶狭間合戦前）

大高城に関する記録の中で、その存在を示す最古の年紀は、「寛政譜」の水野貞守（一四三七～八七）の項で「三河國刈屋、熊村、大日、大高、常滑等の諸士其手に屬せしかば、やがて刈屋に城を築てうつる。」とする記述である。貞守の歿年を「長享元年五月十八日」とし「年五十一」で歿したとしているため、貞守が「大高」を領したのは、長享元年（一四八七）より三十年くらい前までの間ということになる。

貞守の曾孫・忠政（一四九三～一五四三）の項でも「刈屋小河大高の城に據て、その地を領す。」とし、忠政嫡男の信元（生年未詳～一五七五）では「父に繼で小河、大高、半田、西川、刈屋、西尾等の城々をかねたもち」とある。また、貞守の弟とする為善（生歿年未詳・水野大膳家の祖）の事績を記す「寛政譜」にも「文明中より尾張國大高城に住し、兄藏人貞守に屬す。」とあるため、文明年間（一四六九～八七）に水野氏一族が大高城に居住していたことになる。

為善の系統（水野大膳家）が、貞守直系の家（緒川水野家）に従属していたとするならば、この二つの水野氏の家譜において、共に大高城領有を記すことに矛盾は無いが、既に『刈谷市史』第一章⁴において新行紀一氏が指摘するように、十五世紀中頃段階での水野氏による大高城領有

は疑わしい。諸記録の調査により、新行氏は水野氏系譜には改ざんの形跡が認められる他、応仁・文明の乱以降における知多郡の動向にも着目・検討した上で先の結論を導き出し、仮に後世の作為としないとしても、「寛政譜」における「大高」は、『尾陽雜記』に記された「大高殿」、すなわち戸田法雲が拠った現・武豊町東大高である可能性を指摘する。

『常滑市誌』⁵・『知多市史』⁶・『東海市史』⁷の見解においても、例えば『宗長手記』の大永二年（一五二二）条に常滑の「水野紀三郎」の名を確認できるため、水野氏一族が知多半島西岸に勢力圏を広げていたことは事実だが、まだ大野（現・常滑市）に佐治氏、寺本（現・知多市）に花井氏、木田（現・東海市）に荒尾氏がいる中で、文明年間時点で知多半島北西部の大高まで、水野氏が勢力を拡大できたとは考えられない。

大高城に関するある程度確実な記録は、大高城西方五百米の地に鎮座する氷上姐子社の社主・久米家に伝来した久米家文書⁸である。永正六～七年（一五〇九～一〇）における本殿・拝殿の修理遷宮事業において、「大高城主花井備中守」が「大壇那」として関与していることが、同家文書の「氷上社遷宮祝詞写」・「氷上社遷宮行列書写」・「氷上宮記」・「朝亭社遷宮祝詞写」に記されている。

この花井備中守と寺本花井氏との関係や、天文二十四年（一五五五）発給の二通の「織田信長判物」⁹にみられる信長方の「花井右衛門尉兵衛」・「花井三河守」との関係は不明だが、「寛永傳」及び「寛政譜」巻九百五十七の花井氏の項にも「先祖は尾州大高の城に住す。」とあるように、久米家文書のとおり、少なくとも十六世紀初頭時の大高は花井氏領だったと考えてよい。このことから、水野氏が文明年間より大高城を連綿と有していたとはできない。

久米家文書の「氷上社遷宮祝詞写」^⑩は、天文十二年（一五四三）に「大高村城主水野大膳亮家臣村瀬隼人」を「大願主」として、永正六年（一五〇九）に修繕した「正神殿」を「こけらふき」で吹き替え、「金銀瑠璃」の装飾を施し、拝殿の修理、鳥居の建立を行ったという記録である。よって、永正六年から天文十二年にいたる三十年余の間に、花井氏から水野氏へ城主が交替したことになるが、この時期・交代の経緯は明らかにしない。

なお、『知多郡史』上巻^⑪では、南北朝期の尾張国守護・土岐頼康（一三一八～八七）の配下として大高の北部・鷺津山に土岐氏一族の鷺津殿がいたとし、また、土岐氏の守護代として花井の名を記す。後に鷺津殿は小川氏や仁木義長と共に南朝方に下ったことで、土岐頼康によって捕らえられて師崎（南知多町）へ配流、小川氏は処刑されたとし、一族の一部は池田の姓を称して生き延びたと記すが、史料根拠は明示されていない。

なお、『太平記』第三十五巻^⑫の「尾張小河土岐東池田等の事」には「小河兵部丞」と「土岐東池田」が仁木に同心して「小河の庄の城」に立て籠もり「土岐宮内少輔」に攻め落された話がある。小河は斬首され、東池田は一族ゆえに助命されて「尾張の番頭崎」へ流されたとする。この「番頭崎」に「はすがさき」の振り仮名があるため、師崎とほぼ同地区である。このことは『尾陽雜記』卷之三^⑬に掲載された「水野姓系譜」の「下野又次郎 或中務丞」という人物の経歴により詳細な記述があり、共通して伝承された逸話があったと思われる。『太平記』・『尾陽雜記』の話と『知多郡史』の話は類似点が多いため、『知多郡史』の話の出典は検討を要する。

久米家文書の製作年未詳「久目五十代嗣子後裔系譜」^⑭にある久米清長

（一五〇〇～六〇）の事績に「駿州今川義元於桶峽ニ与信長公合戦之時、清長籠于大高城ニ竟於子蔵池討死」とする記載がある。大高城が今川方となった後、久米氏は今川方として大高城に入り、「子蔵池」で討死したとする。久米氏は氷上姐子社の神領を預かる立場から、大高城主が代わっても、その時々城主に従わざるを得なかったのだろう。

久米清長の嫡男・忠長（生歿年未詳）に次いで久米氏の名跡を継いだ清長二男の正長（一五六一～歿年未詳）の段階では「為武権」家領散田^シ爾以還、家事極貧弊也」とあり、今川方に与した影響か、氷川姐子社領は荒れて困窮した状態に陥ったことがみてとれる。その後、慶長十三年（一六〇八）に至って伊奈備前守を通じて徳川家康による「八反歩」の神領寄附を得て再興されたことが記される。正長の嫡男・種長（一五九一～歿年未詳）の母を「大高城主水野大膳亮孫娘」としており、これを桶狭間合戦後に再び大高城主となった水野大膳家と新たに縁を結んだと解釈する。

「寛永傳」及び「寛政譜」における野々山政兼の項に、天文十七年（一五四八）時点で今川方の野々山による大高城攻略の記事があるため、一時、大高城は今川方に占拠されたようである。しかし、三河衆と協働して攻略する予定だったところを、野々山が抜け駆けしたこと、三河衆の怒りを買った反撃を受けた際に三河衆は援軍を出さず、野々山は討死して大高城は織田方に奪還されたという。

家康の生母で緒川水野氏出身の於大の方（一五二八～一六〇二）が、松平広忠（一五二六～四九）に離縁されたのは天文十二年（一五四三）であり、離縁の理由が於大の兄・水野信元（生年未詳～一五七五）が今川方より織田方に転じたことであるため、同十七年に今川方による大高



図1 本稿関連地名

城攻撃は時期的にみておかしくはない。

織田信秀方だった鳴海城の山口左馬助・九郎二郎父子が今川方に転じたのは、『信長公記』首巻¹⁵によれば、天文二十二年（一五五三）である。この時、笠寺砦（名古屋市南区）を築いて今川方の武將を入れ、鳴海城には九郎二郎、中村砦（名古屋市南区）には左馬助が立て籠った。

家督を継いだばかりの信長が、山口氏討伐に兵を挙げ、三の山（三王山）・赤塚（共に名古屋市緑区）で合戦となるが、勝敗はつかず相應の被害を出して撤退している。その後、松葉城・深田城（共に大治町）・清須城（清須市）・村木砦（東浦町）・寺本城（知多市）等での攻防、稲生合戦（名古屋市西区）等が続いたため、山口氏対応は膠着状態とならざるを得なかった。

以降、桶狭間合戦ま

での七年間の内で、山口氏が大高城・沓掛城（豊明市）も「調略」によって「乗取」ったとする。そして、今川方勢力が大高城に入り、朝比奈筑前守や鶴殿長持¹⁷が今川方の城代として順次大高城に着任した。

大高城が鳴海の山口氏によって「調略」された時期の記録は無いが、おそらく天文末年から弘治元年（一五五五）までの間ではないかと推察する。あくまでも傍証だが、『松平記』一や「武徳編年集成」・「三岡記」及び、「寛永傳」・「寛政譜」の阿倍忠政・大久保忠員・忠世・忠佐・忠勝、「寛政譜」の鈴木重政・鈴木忠澄・杉浦吉貞・松平郷松平親長・杉浦吉貞ら三河衆の事績として記される弘治元年の蟹江城攻めを一つの根拠として提示したい。

当時織田方勢力圏だった熱田地区より西方への進軍は、渡海以外では不可能である。『信長公記』では「二の江」（弥富町）の「坊主、服部左京進」は信長の手に属さず、桶狭間合戦時においても「舟千艘ばかり」を出し、今川方として海上で牽制、大高城下の「黒末川口迄乗入れ」ていた。

『朝野舊聞褒貶』所載の「貞享書上」における「大橋新三郎」の項では、蟹江城攻めの時期を「八月三日」、蟹江城主を「武衛の智織田民部」とし、「上方の諸兵」も「楯籠」ったとする。ここまで詳述した記録は他には無く、「織田民部」なる人物も織田家の系譜で確認できないため、これを事実とするかの検証は必要だが、地理的にみれば服部氏が織田一族と敵対関係になったとしてもおかしくはない。

三河衆が蟹江城を攻めることは、今川氏による服部氏への後援とみるのが自然で、その蟹江城へ兵を送り込むには、大高城周囲が安全圏でなければならぬ。逆に言えば、大高城を今川方が領したことで、蟹江城攻撃が可能となったともいえるのではないだろうか。よって、弘治元年（一五五五）までには大高城は今川方の手に属していたと推測する次第である。

その後の大高城が一次史料に現れるのは、永祿三年（一五六〇）の桶狭間合戦前後期で、次の六通の史料が遺る。①永祿二年（一五五九）八月二十一日付で今川義元が朝比奈筑前守に大高城への在城を命じた判物^⑲、②同年十月二十三日付で今川義元が奥平監物及び、③菅沼久助に与えた十月十九日の大高城への兵糧入れ武功に対する感状^⑳、④（永祿三年）六月十二日付で今川氏真が鶴殿十郎三郎に与えた同二年十一月十九日及び同三年五月十九日の「大高口両度合戦」に対する感状^㉑で、その他、合戦後に今川氏真が岡部五郎兵衛尉の鳴海城での功績を讃えた⑤永祿三年六月八日付及び、⑥同年九月一日付の二通の判物にも、大高城と沓掛城が「相捨」・「自落」になった旨の文言がみえる。

松平元康が兵糧入を行ったことを証する一次史料は存在しないものの、先の三通の感状（②・③・④）により、永祿二年十月十九日に奥平・菅沼両氏による兵糧入が行われたことは確かめられる。鶴殿に対する感状の「十一月十九日」は、おそらく奥平・菅沼両氏による兵糧入時の書き間違いと思われるが、別個の合戦だった可能性も捨てきれない。少なくとも兵糧入時に合戦があったわけで、兵糧入が危険を伴う作業だった事実は読み取れる。この大高城兵糧入に関しては三章で詳しく検証する。

二 大高城史の再検証（桶狭間合戦後）

桶狭間合戦後に松平元康が大高城を放棄して撤退した後は、水野大膳家が「大高城」を領したと考えられる。「寛政譜」の水野正長の項では「織田右府につかへ、右府ことあるの、ち東照宮につかへたてまつり、尾張國大高の城にあり。慶長五年關原の役に供奉し、創をかうぶり、のち其創愈ずして死す。」とある。

永祿十年八月十八日に里村紹巴が大高城の「水野防州」に招かれたことが『紹巴富士見道記』^㉒に見られ、大高城を「名城」・「城は松風の里、麓は呼続の浜なり。」と描写している。また、「水野防州」を、「水野周防守元氏は大高・大膳介事とそ 元氏聳「水野左近高木主水」とするが、この元氏なる人物は「寛永傳」・「寛政譜」では確認できない。しかし、「大膳介」と称しているため、「水野防州」は水野正長本人、または正長に近い人物と推察する。

いずれにせよ、永祿十年に大高城に水野「大膳介」がいたことは確かであり、水川姐子社主・久米正長の妻を「大高城主水野大膳亮」の「孫娘」とする記述や、後世の地誌である「尾州知多郡覚書帳」^㉓で大高城は「水野大膳居城」、『尾陽雜記』卷之三で「水野大膳介居城」、『尾張徇行記』^㉔で「大高ノ城主水野大膳大輔」とする記述とも符合する。

すでに『刈谷市史』第一章で新行紀一氏が指摘したように水野大膳家（新行氏は「大高家」と称す。）の系図は安定しないため、記述全てを信じるわけにはいかないが、「寛政譜」による水野大膳家の系譜では、大高城を領した四代正長は家康に仕え、関ヶ原合戦で受けた傷が治癒することなく亡くなったとするのは事実とみなせようか。

なお、『張州雜志』卷第二^㉕に記載された大高城に隣接する水野大膳家の菩提寺・春江院の来歴には注意を要する。春江院は緒川水野家の忠政の弟で、「大膳」・「和泉守」と称した忠氏を開基として、忠氏が歿した弘治二年（一五五六）に、忠氏の法号「春江全芳」を寺名として建立された寺とする。水野忠氏もまた「寛永傳」・「寛政譜」に見えない名である。

創建を弘治二年とするならば、前年に行われた蟹江城攻め時点ではま

だ、大高城には水野大膳家がいたことになる。水野氏と今川氏が敵対関係に無かったことを証する史料として、「別本士林証文」所収の年次未詳「水野十郎左衛門尉宛今川義元書状写」⁽²⁸⁾が引用されるが、宛先の「水野十郎左衛門尉」を緒川水野家の信元に比定した五十嵐正也氏の研究⁽²⁹⁾により、この文書の発給年は天文二十〇二十二年（一五五一〜五三）と推定されている。

天文二十三年（一五五四）正月に、水野氏の居城・緒川城攻略を目的として築かれた今川方の村木砦攻めがあるため、同年以降の水野氏は桶狭間合戦に至るまで今川氏と敵対関係が続いたはずである。水野大膳家もまた緒川水野家と行動を共にしたと思われるため、大高城に敵方の水野大膳家がいた状態で、今川方が蟹江城へ三河衆を派兵できたとは考えられない。

弘治元年に大高城が今川方の手に帰しているとすれば、その翌年の弘治二年時に水野大膳家の菩提寺を大高城に隣接して創建することはできない。たとえ建立できたとしても、その後の大高城は今川方の手に落ちたことは事実のため、今川氏占領下で水野氏の菩提寺として寺地を維持できたとも考えられない。仮に春江院の創建が弘治二年だったとしても、別地での創建であることも想定すべきだろう。春江院は桶狭間合戦後に大高城主になった四代正長時に城地と接する場所に建てられたと推測する。

四代正長の跡を継いだ五代正春（正忠）⁽³⁰⁾は、二代將軍秀忠の下で御書院番を勤め、父の遺領三千五百石を継いだ。天正十一〜十三年（一五八三〜八五）頃の「織田信雄分限帳」⁽³¹⁾でも四代正長と推定される「水野大膳」の領地は千八百貫文とされており、一貫を二石とする換算値に照らせば

「寛政譜」の石高と近似している。

しかし、五代正春（正忠）は秀忠の「御勘氣」を蒙って領知没収となる。六代正行（正蔵）は父と同じく秀忠の御小性組として仕え、父とは別に廩米三百俵を賜っていたが、父に連座して廩米を没収されてしまった。しかし、時期不明だが六代正行（正蔵）は家名を許されて再び御小性組に復帰し、廩米も元に戻されて後に五百俵に加増されている。「寛政譜」では、六代正行（正蔵）の歿年を寛永七年（一六三〇）四月八日、七代正行（正幸）の歿年を承応二年（一六五四）五月十一日とする。

この五代正春（正忠）改易の記事は、『台徳院殿御實紀』卷廿六の慶長十九年（一六一四）四月十一日条に「駿府記」を出典とする記述があり、この日に五代正春（正忠）が歿したとして、水野大膳家改易のいきさつが記されている。五代正春（正忠）の領地は「寛政譜」の数値とは若干異なる三千三百石とする。

秀忠の「御勘氣」を蒙った理由は、「直日を怠り」、すなわち勤務する日を懈怠したという意味だろうか、この理由によって秀忠の不興を買ったのみならず、「御ゆるしなくして死しければ」、すなわち秀忠の許しなく自死したことで、さらに怒りを買って領知没収となったという。この記述が正しいければ、水野大膳家が大高城を失うのは慶長十九年である。

これまでみてきたように、桶狭間合戦後も大高城は織田・豊臣政権下から徳川政権下に至るまで三千三〜五百石程度の小名・水野大膳家の居城として存続したことは明らかで、現況の遺構は桶狭間合戦時の姿ではなく、合戦後半世紀にわたる水野大膳家の居城として整備・利用された後の姿とみなければならぬ。本丸と二之丸を画する堀の発掘調査でも、薬研堀から箱堀へ改修した痕跡が発見され、桶狭間合戦時以降の利用の

経緯が一部だが判明している。

『尾張國知多郡誌』³⁴⁾における「尾陽錦」・「大高村舊記」を出典とする記事では、城跡の一面に尾張藩重臣・志水氏が屋敷を構えたのを元和二年（一六一六）としており、水野大膳家改易が慶長十九年ならば時期的には符合する。水野大膳家領は尾張徳川家領に組み入れられ、城地は遺されたものの、城地を引き継いだ志水家は利用を一面に留めたことで、大高城は実質的には慶長十九年をもって廃城になったといえよう。ちなみに同書では志水邸の廃絶を明治三年（一八七〇）とする。

『台徳院殿御實紀』の内容では、「御勘氣」を蒙った五代正春（正忠）は慶長十九年（一六一四）四月十一日に自死したとする。しかし余談だが、旗本・水野大膳家の菩提寺・曹洞宗長泉寺（東京都文京区本郷）に遺る墓石銘（図版1）では、「泰運院殿興山永立居士」こと「水埜大膳正忠」の歿年は「元和四戊午十一月十一日」になっている。ただし、この墓は「覺禪院殿實傳玄參居士」こと「水埜九右衛門正藏」、「顕忠院殿實相善心居士」こと「水埜佐太夫正幸」の合葬墓として、寛政三年（二七九二）九月に十三代正恭が再建した後墓であつて当初墓ではない。

同墓に刻まれた六代正行（正蔵）の歿年は「寛永七年午年四月八日」、七代正行（正幸）の歿年は「承應二癸巳年五月十二日」としており、七代正行（正幸）の歿日が一日違うものの、「寛政譜」記載の歿年とほぼ一致している。家伝による歿年に違いは無いと考えるものの、「寛永傳」での五代正春（正忠）歿年は、『台徳院殿御實紀』の記述通り慶長十九年四月十一日であるため、長泉寺墓石の歿年銘が意味するところは検討を要する。

なお、水野大膳家の墓所は整理され、この合葬墓の他に「水野家先祖

累代之墓」とする累代墓が遺るのみである。もう一基は、明治四十年（一九〇七）・大正十年（一九二二）に亡くなった同家末裔当主の合葬墓として用いた後に

累代墓としているが、「多賀角左衛門娘水野九右衛門母享年八十三歿哀子 水野正長建」の元銘が遺されている。元は八代雅房（一六二四～九一）の室の墓で、雅房の二男の十代政長（一六八二～一七四二）によって建立されたことは判るが、歿年の記載は無い。

以降の水野大膳家は、十代政長時の元禄十年（一六九七）七月二十六日に、廩米を改め下野国都賀郡内において五百石を拝領し、以後五百石知行の旗本として近代以降も家名は存続した。

三 大高城兵糧入記録の検証

松平元康による大高城兵糧入については、江戸幕府正式記録である『東照宮御實紀』では本編巻二と附録巻一の二箇所に記載がある³⁵⁾。いずれも兵糧入の時期は、元康十八歳時の永禄二年（一五五九）のこととする。二つの記録を整理すると、次のような経緯となる。

① 永禄二年頃、織田信長が鳴海近辺に砦を設けたことで、今川義元の怒りを買ひ、大高城に今川一族の「鵜殿長助長持」を配置する。



図版 1 長泉寺水野大膳家墓所
左側が水野正春合葬墓

②織田軍が大高城にせまり城内の兵糧が欠乏する。今川方の他の武將が尻込みする中、十八歳の松平元康が、永禄二年四月九日に兵糧入を成功させる。

③大高城兵糧入にあたり、寺部・拳母・廣瀬の三城を攻める体を装い、鷲津砦・丸根砦の兵をおびき出し、その隙に大高城へ兵糧入を行ったとする異説がある。松平親俊・酒井正親・石川数正を先鋒として寺部城を攻め、元康は千二百駄を用意して大高城へ運び込む。

④大高城兵糧入は今川義元より「第一の御若年の御美譽」とされる。

⑤永禄三年、今川義元、四万の大軍で尾州へ侵攻する。

⑥松平元康、「先隊」として供奉し、丸根砦を攻め落す。鷲津砦は駿河勢が攻め落す。

⑦今川義元、鵜殿に代えて元康に大高城を任せる。

⑧今川義元、桶狭間で討死し、今川勢壊滅する。

⑨大高城の元康の下へ、水野信元より浅井六之助が使者として遣わされ、今川義元討死の報をもたらす。水野は大高城退去を勧める。元康、現時点では織田方である水野の報告を疑い、大高城二之丸より本丸へ移って、「守禦の備」をとる。

⑩岡崎の鳥居忠吉より今川義元の討死、岡崎城は守將が退いた旨が伝えられたことで、その夜、月の出を待って大高城を退去する。浅井六之助を嚮導とし、上下三十人ばかりを従え、道々の一揆勢を追い払い、池鯉鮒を経由して岡崎へ向かう。

⑪永禄三年五月二十三日、元康、岡崎城へ十七年ぶりに入城する。

以上の整理をみる限り、江戸幕府の公式見解としては、元康の大高城入城は、桶狭間合戦前日と永禄二年四月九日の二回と数えており、元康

の武功とする「大高兵糧入」は、初回の永禄二年のこととしている。

二次史料の中で比較的早く十七世紀初頭の寛永初年頃に成立した『三河物語』³⁶では、「大高之兵糧入」と桶狭間合戦前夜の大高城入を別とする見解は同じだが、初回の入城を家康十七歳時の永禄元年とする点が異なる。その他諸書においても二度の入城を記述するが、初回の入城を永禄元年とするのは大久保忠教著の『三河物語』のみである。

『三河物語』が「御一大事」として評価するのは、初回の兵糧入にあたり元康が決断した行為である。元康は兵糧入を行うにあたり、鳥井四郎左衛門尉・杉浦藤次郎・内藤甚五左衛門尉・内藤四郎左衛門尉・石河十郎左衛門尉・杉浦八郎五郎を「物見」に出して報告させたところ、敵方の守りが固いことをみて、皆が兵糧入の断念を進言する中、ひとり杉浦八郎五郎のみが決行を主張する。その真意を訪ねたところ、敵方は軍勢を山の上に引き上げており、これは戦をする意思が無いと喝破する。この杉浦の意見を聞いて元康は決行を決断して、見事大高城への兵糧入を成功させたという筋立てである。この逸話は、他の多くの書誌が採用しているが、『東照宮御實紀』での記載は無い。

『東照宮御實紀』ではこの杉浦の献言に代わり、「異説」と断りつつ③の寺部・拳母・廣瀬三城攻めを元康の武功に挙げている。この武功は、大高城を牽制する鷲津砦・丸根砦の織田方兵を攪乱するため、敢えて他の三城を攻撃して両砦から援軍が出された隙に、警戒が手薄になった大高城へ難なく兵糧入を成功させたという逸話である。これを若年の元康が発案したことで、「三河記」では「雖為若年智勇兼備給ヘタリト諸人舌ヲソ振ヒケル」とまで絶賛している。

しかし、この武功は眉唾である。尾張・三河の地理を知らない者が創

作した話と言わざるを得ない。「武邊咄聞書」や「落穂集」では、各城へ放火した火の光が鷺津・丸根砦から見えたことで、両砦の兵が異変に気付いたとするが、現在の愛知県豊田市に所在する三城（他書誌では拳母・廣瀬を載せず、寺部・梅坪のみとする場合が多い。）は鷺津・丸根砦より約二十軒離れており、途中には標高七十米強の二村山などの山々が遮り、たとえ煙が立ち上ったとしても視認できる距離では無い。またそれほど離れた場所へ砦の防御を手薄にしてまで援軍に向くのも不合理である。

これは『三河物語』で、元康が兵糧入を終えて岡崎へ帰還した後、義元の命によって三城を攻めたことと記された内容を混同している。『東照宮御實紀』でも正しく読めば三城攻撃を高都城兵糧入の「此後」の行為としているため、本来は「異説」でしかない逸話だが、単に杉浦八郎五郎の献言を採り上げた程度では、武功としては薄いと感じたのか、時期の違う逸話を取り交ぜて、元康の際立つ武功として意図的に脚色した感がある。

寺部城への圍攻めを記述する書誌は、他にも「武徳大成記」・「三河記」があるが、いずれも十七世紀後半から十八世紀頃に編纂された後の時代の書誌である。中でも享保十二年（一七二七）刊行の「落穂集」は現存する写本の多さからみて全国的に一定度普及した書誌であるため、この間違った家康神話を広く敷衍させる役割を果たしたと思われる。

また、『東照宮御實紀』と同じ公的編纂物の一つである『披沙揀金』³⁷は、林述斎の編纂により『東照宮御實紀』と同時期の天保七～八年（一八三六～三七）頃にまとめられた家康の武功・逸話集だが、ここでは「武邊咄聞書」の話を「異説」としてではなく注釈無く掲載しているため、武功

を脚色する一助となったことは否めない。

諸書誌の内容検討で判ることは、『三河物語』のみが虚実ある話の中で、事実か否かは別にして、とりあえず時系列的に不整合なく元康の実績を記述しているということである。後世の書誌においても概ね『三河物語』の記述以上の逸話は載せられていない。よって、江戸時代に拡散する桶狭間合戦時における元康の武功話の淵源は、『三河物語』に求められるとみて良いだろう。各書誌は『三河物語』の記述内容の解釈ないしは、脚色によって派生していったと考えられる。しかしながら、『三河物語』で大高城兵糧入を永禄元年としているにも拘らず、他書誌でこの年号を踏襲していないことの合理的理由が見いだせない。これは今後の検討課題とする。

なお、元康の大高城兵糧入を桶狭間合戦直前の永禄三年とする説があるのは、『信長公記』の記述が影響していると思われる。中島砦に移った信長が眼前に展開する今川勢を評して「各よく／＼承り候へ。あの武者、宵に兵糧つかひて夜もすがら来り、大高へ兵糧入れ、鷺津・丸根にて手を碎き、辛勞してつかれたる武者なり。こなたは新手なり。」と自兵を鼓舞する言葉の中に「大高へ兵糧入れ」の語があるからである。

五月十九日の合戦直前に大高城に入り、砦攻めを行ったのは元康であるため、桶狭間合戦と同時期に大高城兵糧入を行ったことは間違いない。しかし、『東照宮御實紀』で評価する杉浦八郎五郎の逸話を伴う兵糧入とは別であることを認識する必要がある。

この永禄三年の大高入城についても書誌の記述では実行日に若干の違いはあるが、この時に丸根砦を攻撃して陥落させた事、義元の死を当時敵方だった伯父の水野信元より聞かされたが慎重に判断し、今川方から

の通報を得て撤退を開始したこと、撤退には水野から遣わされた浅井六之助が嚮導したことといった内容が、採り上げ方の違いはあるものの、諸書誌の概ねの記述において一致している。

大高城への兵糧入を永禄三年のみとする「信長記」・「松平記」・「三河記大全」・「三河記摘要」の中で、兵糧入時の杉浦八郎五郎逸話と丸根砦攻め・大高城撤退の逸話を同時期として載せるのは「三河記大全」のみである。その他には「鷲津砦」を攻撃したのを永禄二年とする「武徳編年集成」の二記録しか存在しない。「信長記」には杉浦八郎五郎の逸話は無い。

元文五年（一七四〇）編纂の「武徳編年集成」や、刊行年未詳だが江戸後期の編纂と思われる「三河記大全」の記述は、経年過程における事実誤認があるともてよからう。大半の書誌は、杉浦八郎五郎逸話を永禄二年とし、丸根砦攻め・大高城撤退を永禄三年とするため、数の上においての判断だが、江戸時代の書誌では、杉浦八郎五郎逸話と丸根砦攻め・大高城撤退の逸話は別の年の出来事と認識されていたといえる。

先述のとおり、元康の武功として称賛される大高城兵糧入は、書誌の整理で見ると永禄二年時の出来事のみをいう。これを永禄三年のものと誤認したのは、『信長公記』の記述に引つ張られた近代以降のことと考えられ、何かしらの原作を基にした映像化等により浸透していったのではないかと推測する。

しかしながら、実際に永禄二年に元康による兵糧入があったか否かについては別に議論を要する。『東照宮御實紀』で兵糧入を永禄二年四月九日としているが、この年紀を載せるのは「武邊咄聞書」と「落穂集」のみである。他書は概ね永禄二年時のこととするが、「三河物語」・「關

野濟安聞書」・「明應至永禄雜記」では永禄元年、「武徳編年集成」では永禄二年三月、「伊東法師物語」・「前橋酒井家舊蔵聞書」では弘治三年四月十日とするなど、書誌による違いがみられる。当然のことながら、永禄二年四月九日を含めて日を特定する根拠は全く存在しない。その上で、次章において大高城兵糧入の実態について検証を行う。なお、各書誌記述の概略については表1を参照していただきたい。

四 織田方陣城構築・大高城兵糧入の時期

兵糧入を行い、かつそれが武功と賞されるのは、織田方が鷲津砦・丸根砦を築いて経済封鎖を仕掛けて以降であるため、まず、どの時点で両砦が築かれたかを検討する必要がある。天文二十二年（一五五三）に鳴海城の山口氏が離反してもすぐに鳴海城を攻略できなかったのは、信長の地盤が盤石ではなかったのが一因と考える。清須城の織田大和守家との対立も影響したはずである。翌二十三年頃に清須城を攻略するが、この時、逃亡した重臣・坂井大膳が頼ったのは今川義元であると『信長公記』が記すように、信長の背後を脅かす勢力への今川方の助勢が推測される。

また、同年正月に行われた今川方の村木砦の攻略は、前年に成った美濃国斎藤道三との連携を背景に、那古野城付近までの後詰の兵を得られたことで可能になった遠征である。別の見方をするならば斎藤氏の援軍がなければ、今川方勢力圏への遠征が不可能だったことを意味している。弘治二年（一五五六）四月に道三が息子・義龍（一色范可）に討たれたことで、この連携は破綻し援軍派兵は途絶える。以降の信長の行動は制限されたはずで、しばし北方方面の対応に苦慮している様子が諸記録か

ら伺われる。

同年八月には義龍（一色范可）と呼応した弟・勘十郎（達勝・信成）との間で稻生合戦が勃発する。この戦いに勝利はしたものの、勘十郎（達勝・信成）はまだ健在である他、岩倉城の織田伊勢守家も対立姿勢を示す。

こういった織田家中及び尾張国北部の不安定要素が解消されるのが、永禄元年（一五五八）から二年にかけてである。永禄元年もしくは前年の弘治三年勃発とされる織田伊勢守家との戦いである浮野合戦での勝利、続く永禄元年十一月の弟・勘十郎（達勝・信成）の殺害、永禄二年もしくは元年と推定される織田伊勢守家の岩倉城攻略によって、一時的に信長は家中及び尾張国北部支配を盤石にしたわけである。

こうした安定を得たことで、永禄二年二月に上洛が可能となったとみるべきである。あくまで傍証のみの検討だが、信長は少なくとも永禄元年末ないしは同二年初頭までは尾張国南方に傾注する余力はなかったと推察する。また上洛を行ったことは、近江六角氏との何らかの協力関係を構築していたことも推察できる。実際、永禄三年七月二十一日に著された「六角承禎〔義賢〕条書」〔草津市蔵³⁸⁾〕には、美濃国守護・土岐氏再興に向けた織田氏及び越前朝倉氏との間で、美濃国の義龍（一色范可）を牽制する何らかの連携があった痕跡を示す記述がある³⁹⁾。信長は敵対勢力の一掃と、背後の脅威を封じる対策ができたことで、鳴海城周辺への攻撃を本格化させたとみるべきではなからうか。

そのため弘治三年の兵糧入はあり得ない。『三河物語』が示す永禄元年も完全には出来ないものの、上洛して尾張を不在にしている間に今川方を刺激するのは得策ではない。鳴海城・大高城に対する陣城が築

かれたのは信長の帰国後、すなわち、永禄二年二月以降と考える。

あくまでも傍証だが、今川義元が駿河・遠江・三河の宿中に対して永禄二年三月十八日に「伝馬壺正」を出すように命じたのも、織田方の陣城構築が本格化したことで、全面対決が不可避となった事態への対応とも考えられる。また、これまで内容に疑義がある史料とされてきた永禄二年三月二十日付の今川義元定書写は、「一城囲時、兼而相定攻手之外一切停止之事」とする文言があるなど、織田の陣城構築に対処するという時宜に応じた内容とも考えられるが、これについては参考提示に留める。

なお、全ての陣城を同時に構築したとは考えられないため、地理的に考えてまずは鳴海城の包囲を行い、鳴海城南東方に築いた中島砦を足掛かりにして、鷲津砦・丸根砦を段階的に築いたと考える。朝比奈筑前守に対して大高在城を命じた永禄二年に比定される八月二十一日付の今川義元判物は、あるいは両砦の完成によって鳴海城と大高城の分断がなった時期を示唆しているのかもしれない。

そして、先述したとおり奥平監物と菅沼久助が九月十九日に大高城へ兵糧入を実施している。しかし、不思議なことに奥平氏の家譜⁴⁰⁾では兵糧入を元康と共に三月に行ったとし、『寛政譜』の奥平貞勝（監物）の項目においても同様の記述になっている。『朝野舊聞褒藁』所載の書誌で見ると、元康が永禄二年三月に兵糧入を行ったと記述するのは、元文五年（一七四〇）完成の「武徳編年集成」のみで、「奥平家傳記」と「奥平家系」も『朝野舊聞褒藁』に収載されているものの、両記録とも貞勝（監物）への感状があると記しながら、前者では二月、後者では三月に兵糧入を行ったとして同じ家の記録でも記述に差異がある。

他に永禄二年時の月日を記すのは、享保十二年（一七二七）完成の「落穂集」における「四月九日丑の刻」のみである。また、他書誌においても奥平・菅沼両氏と共に兵糧入を行ったとする記録は無い。二月にせよ四月にせよ、陣城構築を永禄二年二月以降と推定するならば、この時期の兵糧入には疑義が残る。陣城構築による封鎖から兵糧枯渇に至る期間をあくまでも感覚の上で推測するならば、あるいは奥平・菅沼両氏による九月十九日が初めての兵糧入だった可能性も捨てきれない。

奥平・菅沼両氏は後に徳川家臣団に組み入れられていくが、永禄二年時における松平氏と両氏との関係は史料的に確認できない。菅沼氏は桶狭間合戦後の松平氏による三河戦略によつて被官化していくものの、両氏共に今川義元配下においては三河における国人衆として別個の存在だったはずで、この時点で同じ国人の一人である松平氏の指揮下にあったとは考えられない。奥平氏の家譜において、元康の配下として兵糧入を行ったと記すのは、桶狭間合戦時点で既に徳川氏（松平氏）の配下だったことを遡及的に書き記しただけであり、時期についても、あるいは「武徳編年集成」の記述を単に鵜呑みにしただけのように思える。徳川将軍家との縁を重視する上で、奥平氏の場合、本来明確な兵糧入武功の日付が伝わっているのも拘らず、後発で敷衍した書誌情報に引っ張られる形で家譜を書き換える事態になったのではなからうか。

結論としては、元康による大高城兵糧入の実態は不明と言わざるを得ない。ただし、頻繁に兵糧入が行われたとも考えられないため、奥平氏の家譜が記すように、あるいは奥平・菅沼両氏による永禄二年九月十九日の兵糧入に元康が参加していたとする見解も、可能性の一つに数えられる。

五 家譜にみる大高城兵糧入・桶狭間合戦

江戸時代まで存続した大名・旗本の中で、寛政年間（一七八九～一八〇一）に編纂された「寛政譜」で桶狭間合戦時の事項を記すのは表2のとおり七十六人を数える。その内、大高城兵糧入に関する記述があるのは、いずれも当時松平方だった奥平貞勝・小栗吉忠・酒井正親・杉浦勝吉・成瀬国次・平岩親吉・藤井松平信一の七人のみで、各家が永禄二年のこととしているため、各書誌で讃えられる大高城兵糧入の武功は、永禄二年時のことと認識されていたことを裏付けている。

しかし、そのいずれもが寛永年間（一六二四～四四）時に編纂された「寛永傳」には、大高城兵糧入に関する記述を載せていない。大高城兵糧入については、あくまで「寛政譜」のみに記された武功である。このことは、当初大高城兵糧入は喧伝するほどの武功ではなかったか、兵糧入自体が無かったかを意味している。永禄二年の兵糧入を無かったとするには、『三河物語』の記述は具体的であるため、大久保家のみに伝わった話としても何らかの事実を内包していると考ええる。しかし、その情報が当時、どこまで普遍的に共有されていたかとなると疑問である。

あくまでも仮説だが、「寛永傳」編纂時においては、大高城兵糧入はそれほど称賛すべき武功としての認識は無く、『三河物語』で「御一大事」と評価され、同書を底本としてその他の書誌がこの行為を重ねて称賛するにおいて、諸家においても自家の武功への紐付けが行われた結果、「寛政譜」で追記されることになったのではないかと推察する。第一の武功ともいふべき杉浦八郎五郎（勝吉）ですら、「寛永傳」では来歴の記載は無く、父・吉貞が永禄六年の三河一向一揆で武功を立てたことを記すのみである。

桶狭間合戦当時武功として特出されていたのは、鳴海城を最後まで守り通した岡部五郎兵衛尉（元信）で、合戦後に今川氏真から出された二通の判物にも武功が讃えられている。沓掛城・大高城が「相捨」・「自落」したのにも拘らず、鳴海城を「堅固^ホ持詰」・「相踏于堅固」た上、城兵の帰還を果たしたばかりでなく、帰還途中に刈谷城を攻め水野信近を討ち取るという功績まで挙げたことで、これまで没収されていた土地が岡部に還付された。『三河物語』では信長と交渉して義元の首を持ち帰ったとも記されている。今川家中随一といってもよい武功である。

それに対し元康の大高城撤退は、その判断力や退却時の統率力を家中が称賛したとしても、今川家からみれば城を「相捨」、「自落」しただけであり、取り立てて賛美する行動ではない。岡部への判物において沓掛城や大高城を例に出して岡部を讃えているのは、結果として鳴海城を見捨てた元康の行為は、揶揄される程度のこととしか評価されていないのである。

敵方に防衛線を張られた中で兵糧入を行うことは危険を伴う戦時行為であり、それを成功させたことは評価に値する。大高城にいたと思われる鶴殿十郎三郎に対する今川氏真の感状⁴⁵では、前年の十一月十九日及び同年の五月十九日の二度にわたり「大高口」で合戦となり、鶴殿は太刀や鎧で三ヶ所の疵を追っていることが記されているのも、簡単な行為でなかったことを物語っている。

この内、五月十九日が元康の入城時における戦闘だろう。少なくとも元康は永禄三年時に戦闘状態に陥っても兵糧入を成功させ、大高城に入城した後に丸根砦を攻め落している。この時、家中の幾人かが討死をしていることは武功として評価されてもよい。事実、このことに関しては

数人の家譜に武功として記されている。ただし、今川家中全体の評価としてみた場合、桶狭間合戦時の元康の行動は毀誉褒貶が相半ばして武功が相殺された感がある。そのため、「寛永傳」編纂段階では、武家の間での共通認識に昇華しきれておらず、喧伝すべき武功という認識も希薄だったのではないかと推察する。永禄二年時に元康による大高城兵糧入はあったと思われるが、果たして『三河物語』が絶賛するほどの武功として、松平家中で評価されていたかとなると、甚だ疑問であると言わざるを得ない。

六 大高城は取り囲まれていたのか

大高城周囲には鷺津砦・丸根砦の他に大高城南方に正光寺砦、西方に氷上山砦が機能し、剩え城の南方に近接する水野大膳家菩提寺・春江院境内地を含む丘陵にいわゆる向山砦があることが、平成十年（一九九八）に藤井尚夫氏⁴⁶により提唱されて以降、周知のように敷衍している。

鳴海城が西側の海を除く北方に丹下砦、尾根続きの東方に善照寺砦、南東方に中島砦の三つの砦で包囲しているため、大高城も北方の海以外の三方を包囲されたという思い込みにより、正光寺砦・氷上山砦も桶狭間合戦時に機能したと解釈したようだが、このことについては甚だ疑問である。正光山砦・氷上山砦について、桶狭間合戦との関連を述べた書誌は皆無どころか、一部の地誌・図面にその存在が軽く触れられる程度である。

桶狭間合戦時の砦群については、千田嘉博氏⁴⁷や高田徹氏の研究⁴⁸に詳しいが、千田氏は正光寺砦・氷上山砦の存在を評価していないため、両砦に関する論究は無い。高田氏は桶狭間合戦関係の砦の可能性を指摘しつ

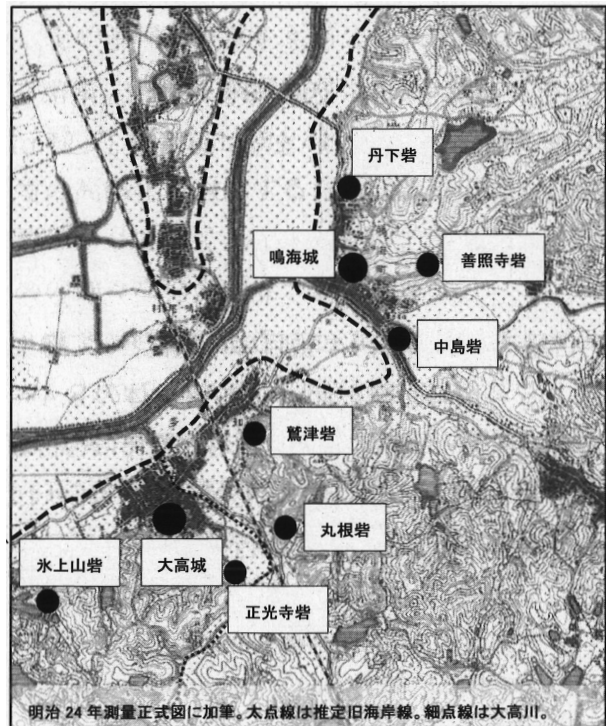


図2 鳴海城・大高城周辺砦

つも、遺構については疑義を呈す。正光寺砦推定地は現況では開発されて遺構を確認できず、氷上山砦推定地についても遺構らしき場所は存在するが、積極的に城郭遺構と評価できないとしている。

江戸時代の地誌で正光寺砦・氷上山砦について記述されるのは、管見の限り『張州雑志』巻第二のみで、しかも場所を記す以外の記述は無い。その他には榊原邦彦氏が紹介した尾張徳川家史料の「尾州之内吟味之場所」⁵⁰に「其外鷺津丸根正興寺氷上と申候て取出之跡も四ヶ所御座候右何も大高令之手当之場所と相見申候」と記されている。当史料の製作年は不明だが、国境等における「變事」の折に軍勢を置く場所の調査とする前文より、尾張藩の軍制改革が行われた十八世紀後半～十九世紀初

頭頃の史料ではないかと推察する。

榊原氏は鷺津砦・丸根砦に加えて正興（光）砦と氷上山砦の二砦も大高城包囲の砦と記述した史料と解釈しているが、「大高令之手当之場所」との文言は、大高城から手当された場所、すなわち大高城の属城という意味であって、この記述をもって「正興寺氷上」の二砦が大高城包囲の砦と認識されていたとすることはできない。「尾州之内吟味之場所」の筆者は合戦時の歴史を正しく理解していなかったと思われるため、この史料もまた、単に大高城周囲に砦があったことを記すのみとの評価にしかない。

尾張藩によって桶狭間古戦場調査が行われた折の一連の図面では、「知多郡大高村古城絵図」⁵¹に「正光寺取出山」、「尾州知多郡大高古城図」⁵²に「ひかミ取手」・「正光寺取手」、「桶狭間合戦之図（大高兵糧入）」⁵³に「正光寺取出」の記載はあるが、鷺津砦・丸根砦のように測量に基づく図示では無い。正光寺砦・氷上山砦は単に周辺の古跡として、その位置を図面に落としただけである。

「尾州知多郡大高古城図」には他と異なり「ひかミ取手」の具体的位置が記されており、四方に「堀形」と「土居跡壱色」があったとする。東西二十間・南北八間の規模だが、「誰人居申も存候者無之候」と、すでに江戸時代中期において由緒が伝わっていなかったことが判る。

場所は「ひかミの山」より「十間餘も高く見へ申候」・「取手の山とひかミの山の間百間計」とするため、単純に解釈すれば現在、氷上姐子社がある丘陵の南西部にある丘陵最高地点・氷川姐子社元宮の場所が該当する。ここは尾張国造の娘で日本武尊の配偶者となった宮簀媛命の館があったという伝承がある場所で、氷上姐子社の元宮が置かれているため、

人工的に削平された土地にはなっている。現況が古城図作成時の地形を伝えているとは限らず、ここを積極的に砦跡と評価は出来ないものの、諸地誌で砦跡としたのはこの場所と考える。この場所であれ、藤井氏や高田氏が図示した元宮より西方丘陵上の遺構らしき場所であれ、この丘陵に砦が存在したのならば、それは立地的にみて氷上姐子社主・久米氏関連の城郭と解釈する方が自然である。

先述のとおり久米氏は桶狭間合戦時に大高城に入っているため、氷上姐子社周辺も久米氏の勢力下にあったとみるべきで、ここに織田方が陣城を造れたとは到底考えられない。また陣城であるにも関わらず、最高所の元宮の位置からでも大高城を望見出来ないのは、戦略的機能を有していない。氷上山砦を城郭と評価するならば、それは氷川姐子社主・久米氏に関わる城郭であり、仮に桶狭間合戦時に機能していたとしても、今川方の久米氏の城郭としての機能であって、織田家の陣城としては無いと考える。

正光寺砦推定地は、大高城南方の東正光寺・西正光寺の字名が残る丘陵とされる。北東約六百米の地に丸根砦があり、正光寺砦・丸根砦の間を近世の師崎街道が通る他、正光寺砦推定地の丘陵北側には大高城への道が通る。北西の大高城へも丸根砦とほぼ同距離であり、丸根砦と共に兵を込め置けばこの方面からの大高城への出入りはまず不可能に近い。また、両砦の間を流れる大高川の東側に位置する丸根砦より、川の西側で大高城へ続く道に近い正光寺砦に兵を置く方が大高城を牽制する上でより効果的である。

元康が丸根砦を攻めたことは事実だが、丸根砦との間で挟撃できる位置にありながら、正光寺砦から丸根砦へ援軍が出されたという記述は無

い。また、少なくとも奥平・菅沼両氏によって一度は大高城へ兵糧入をさせていることは両砦の間の連携に何らかの不備があったためで、その欠点を改善せず、翌年にも元康によってまたしても大高城入が成されたということは、機能的欠陥が放置されていたことになる。

結論から言えば、織田方勢力は大高川西岸にまで及んでいなかったと考える。正光寺砦があったとしても、それは今川方勢力圏内での立地だったとすべきである。『信長公記』天理本にある「大高之南大野小河衆被置」の文言をもつて正光寺砦もしくは氷上山砦に大野衆や小河衆が配置されたと読み替える論調があるが、単に南方の知多半島方面には織田方に助勢する大野衆や小河衆勢力が存在したという解釈に留めるべきである。

この考察の前提として、改めて鷺津砦・丸根砦設置の意味を考える必要がある。単純にこの両砦の立地を地理的に解釈するならば、大高城の包囲が目的ではなく、鳴海城と大高城の分断を目的にしたとみるべきで、このことは『信長公記』にも「間を取切り」と明記されている。

鳴海城に対する執拗な包囲網は、鳴海城と同時に支城の大高城をも攻略することではなく、まず東西交通の要であり本城の鳴海城を孤立させて攻略することを第一目的にしたと解釈すべきではなからうか。仮に『信長公記』がいう織田方勢力数が正しいとするならば、一度に両城を攻略するほどの余力は無いはずである。今川勢による鷺津砦・丸根砦の攻撃に対して応援を送れなかったことが、織田方の限界を示している。

この両砦が今川方勢力圏に突出していたとみるべきで、大高川が勢力圏境であると同時に大高城の防衛線であり、大高川東側までが織田方勢力の限界範囲とみなければ、複数回にわたる大高城兵糧入の成功は説明できない。鵜殿長持に対する感状⁵⁵でも戦闘が行われたのを「大高口」と

しており、城から一定度離れた場所に両軍衝突点があったことを示唆している。

その一方で、完全包囲されている鳴海城について兵糧入が取沙汰されないのが疑問である。鳴海城こそ陸路での往来が完全に遮断されており、兵糧の枯渇が真つ先に心配される城である。ここからは単なる仮説だが、大高城は鳴海城への兵站中継地としての機能を有していたのではなからうかと考える。『信長公記』でいう「黒末川口」にある大高城と鳴海城は唯一海上のみが残された連絡手段であり、そのために今川方に与力した「二の江」の「服部左京進」が海上輸送の役を担っていたと推察する。今川勢の目標は、直接の連絡陸路を鷺津砦や中島砦によつて遮断された現況においては、鷺津砦・丸根砦の攻略を行うと同時に、大高城の救援ではなく、鳴海城の救援が主眼だったのではなからうか。

あくまでも傍証だが、その「服部左京進」の家譜で気になる一節がある。「寛政譜」では諱は「政光」で、初名を「政秀」、「右京進」とするが、桶狭間合戦時に「兵糧船一艘」を元康に献上したことが手柄として書かれており、これは「寛永傳」にも見られる記述である。この時、渥美友勝も「寛政譜」において、服部とともに兵糧を献上した旨が記されるが、渥美の場合は「寛永傳」に記載は無い。

服部家の家譜が「兵糧」ではなく「兵糧船」としていることを注視する。大高城から鳴海城への兵糧入の手段として献上したという解釈もなりたつからである。そもそも陸路しか使わない元康に「船」を献上する意味が見いだせない。『信長公記』の記載でも、桶狭間合戦時に「服部左京進」は「大高の下、黒末川口迄乗入れ候へども」と、大高城下に船を寄せていたことが記されている。元康が運んだ兵糧の積み込みをして

いたと解釈するのは、憶測が過ぎるだろうか。

最後にいわゆる向山砦に関する検証だが、その名すら一切の記録には登場せず、伝承も無いのに桶狭間合戦に結び付けるのはいかがであろうか。現地でも積極的に評価できる城郭遺構は存在しない。仮に人工削平地に見えたとしても、大高城の隣にあるから桶狭間合戦遺構とするのは乱暴な議論である。また、現地は水野大膳家の菩提寺である春江院境内の隣接地であり、桶狭間合戦後に半世紀にわたり水野大膳家が大高の地を領した事実から鑑みるに、好意的に解釈したとしても、城地続きの地において菩提寺整備の一環として整地した痕跡とみなすべきである。

おわりに

本稿は松平元康の大高城兵糧入武功を検証するにあたり、大高城及びその周辺陣城についても検討を試みた。あくまでも現存史料が語る範囲というならば、大高城の記録上の初出は、城の西方にある水上姐子社の社主・久米家の記録で、永正六年（一五〇九）に花井備中守なる人物が大高城主だったことが確認できる。大高城は花井氏の居城だったと思われるが、天文年間頃より今川方勢力が大高城周辺に及ぶにあたり、花井氏の去就が分からなくなる。

天文十二年（一五四三）時点の大高城主は水野大膳家に代わっていたことが久米家文書によつて確かめられる。同十七年に大高城は一度今川方の手に落ちるものの、すぐに織田方に奪い返されている。しかし、同二十二年に鳴海城の山口氏が今川方に与したことで、それ以降に山口氏の調略によつて大高城は今川方になったとする。

この時期については不明だが、弘治元年（一五五五）に今川方三河衆

が「二の江」の「服部左京進」を後援するために、軍勢を愛知県南西部の蟹江まで派遣している事実をもって、海上派兵を安全に行う上でも、この時までには大高城は今川方になっていたと推察する。

桶狭間合戦の前哨として鳴海城・大高城に陣城が構えられた時期も不明だが、織田信長の領国安定が永禄元々二年（一五五八～五九）と推定される岩倉城の攻略後であり、それに基づく上洛を永禄二年二月に行っているため、鳴海方面への侵攻に傾注できるのは帰国後の同年二月以降と推察する。陣城の構築によって経済的に困窮したからこそ、兵糧入が必然となるため、大高城兵糧入は永禄二年から同三年の間に起きた出来事と推定する。

江戸時代の書誌の多くや、諸大名・旗本の家譜では大高城兵糧入を永禄二年とし、同三年の桶狭間合戦直前に大高城に入城して丸根砦を攻略したことは別のこととして記録しており、世に喧伝される元康の大高城兵糧入は永禄二年時の行為のみに限定される。

書誌の記録の淵源は『三河物語』に求められ、同書を定本として各書誌の記述へ波及したと考えられるが、時代と共に事実誤認が増す傾向にある。特に大高城兵糧入にあたり、現在の豊田市域にある寺部城等の諸城に囷の軍勢を出したという記述は、『三河物語』の記述を曲解している。この説は『東照宮御實紀』では「異説」となっているが、多くの写本が作られた享保十二年（一七二七）完成の「落穂集」でも同様の記事が載せられたことで、「異説」が事実のように誤認され敷衍していったと考ええる。

なお、『三河物語』で高く評価された大高城兵糧入は、当時それほどの武功とは考えられていなかった可能性があり、家譜においても「寛永

傳」で、この武功に供奉したことを記す家は皆無である。書誌が普及する過程において、改めて自家の武功に紐づけるため「寛政譜」で記載したと思われる。それは家伝というよりも、書誌情報を基本としたか、または奥平氏のように伝来の記録と異なることを承知で、武功を適度的に家康に寄せたと考えられるため、家譜の記述は一概に事実とは判定しづらい。そのため、元康による大高城兵糧入は行われたと思われるものの、実際の時期・経過については不明であり、奥平・菅沼両氏による兵糧入の感状が示す永禄二年九月十九日に元康も参加した可能性を指摘できるのみである。

大高城を取り囲んだ陣城については、小説的な見解が先行している感がある。氷上姐子社主・久米氏が今川方である限り、氷上山に織田方が砦を築くのは不可能である。大高城を封鎖する上で最も効果的な位置にあったと思われる正光寺砦も有効に機能した形跡が無い。両砦の存在までは否定しないが、桶狭間合戦とは関係ない砦とすべきである。ましてやいわゆる向山砦と称している場所は、記録も伝承・遺構も伴わず、説得性のある同定根拠も無い近年の創作史跡と言わざるを得ない。

鷲津砦・丸根砦築城のねらいは鳴海城と大高城の分断である。今川方勢力圏に突出した立地において大高川東側丘陵までが織田家勢力の限界であり、桶狭間合戦時に大高城を包囲する陣城があったという幻想は取り除く必要がある。徳川家康を神格化する上で事実を曲解してまで逸話を作る特に十八世紀以降の書誌において、より武功を強調できるはずの正光山砦・氷上山砦の存在が歯牙にもかけていないのは、桶狭間合戦時に機能した記憶も事実も無かったからである。

桶狭間合戦直後の大高城の帰趨経緯は分からないが、諸記録によりそ

の後は水野大膳家が大高城主として存在したことが確認できる。同家による大高領有の終焉は慶長十九年（一六一四）である。『台徳院殿御實記』には、同家五代正春が二代將軍徳川秀忠の「御勘氣」を蒙って改易になったと記されている。収公された土地はおそらく尾張徳川家領となり、その後、尾張藩重臣・志水家の屋敷が城の一面に建設された。

最後に一つの仮説を提示した。大高城は完全包囲された鳴海城へ兵站基地としての役割を担ったのではないかとの仮説である。「服部左京進」が元康に「兵糧船」を献上している家譜の記録から察し、元康が船を必要とする状況があったのではないかと推察した次第である。

以上が書誌・家譜などがある程度悉皆的に検討した上での結論である。しかしながら紙面の都合により、諸記録を十分に検討できたとは言いがたく、何より史料自体の全文を掲載することが出来なかった。少なくとも検討に用いた諸記録だけでも別の機会に紹介したいと考える。近年、五十嵐正也氏による水野氏の研究⁵⁶が進展しており、合戦時における水野家や知多半島方面の動向に対してもさらに検討を加える必要があることを課題としたい。

補論 伝花井備中守像（長福寺蔵）について

桶狭間の長福寺（名古屋市緑区）には花井備中守の像とみられる木像が伝存している（図版2）。曲録に坐す像高一五・五糎の小像で、裳長も七・八糎あるため、像の総高としては二三・三糎となる。像幅一三・〇糎、像奥行一一・五糎、曲録高三五・〇糎、曲録上部幅二三・七糎、曲録下部幅二〇・八糎、曲録最大奥行一三・〇糎である。裳裏に「寛政七卯冬」「花井備中守後／胤源徂寶（花押）」の彫銘がある。

剃髪・袈裟を纏う法体姿のため、僧侶の頂相とも考えられるが、袈裟は鐙のある禪宗仕様のため、浄土宗である長福寺住持の頂相とは考えられない。大高城主の末裔とする三百石知行の旗本花井家の菩提寺は曹洞宗の定光院（埼玉県深谷市）であり、花井備中守の後胤「源徂寶」なる人物を系譜上で確認できない。あるいは、「源徂寶」は同じく花井備中守の後胤とする名古屋の惣町代・花井家に連なる人物の可能性もあるが、こちら系譜上での確認は難しい。あえて「後胤」として記銘すること、家の宗派と違う寺に奉納するところからみて、像主は花井備中守と推測する。

法体姿にしたのは出家したという家伝が残っていたからであろうか。作像の意図・奉納の経緯は分からないが、江戸時代より長福寺は今川義元や桶狭間合戦戦歿者の菩提を弔う寺として知られていたもので、合戦の舞台・大高城に関係した先祖の供養を寺に託したのではないかと憶測する。後世の作だが、実像が分からない花井備中守を偲ぶ貴重な遺品である。



図版2 伝花井備中守像 長福寺蔵

註

- (1) 『内閣文庫所蔵史籍叢刊 特刊第一 朝野舊聞褒貶』第二卷 汲古書院 昭和五十七年八月発行。
- (2) 『寛永諸家系図伝』第一～第十五 続群書類聚完成会 昭和五十五年一月二十日～平成六年二月十五日発行。
- (3) 『新訂寛政重修諸家譜』第一～第二十二 続群書類聚完成会 昭和三十九年二月二十五日～昭和四十一年四月三十日発行。
- (4) 刈谷市史編さん編集委員会編『刈谷市史 第二巻 本文(近世)』刈谷市 平成六年三月三十日発行。
- (5) 常滑市誌編さん委員会編『常滑市誌』常滑市役所 昭和五十一年三月一日発行。
- (6) 知多市誌編さん委員会編『知多市誌 本文編』知多市役所 昭和五十六年三月三十日発行。
- (7) 東海市史編さん委員会編『東海市史 通史編』愛知県東海市 平成二年三月一日発行。
- (8) 愛知県史編さん委員会編『愛知県史 資料編10 中世3』愛知県 平成二十一年三月三十一日発行 所収。
- 七三九 水上杜遷宮祝詞写「永正六年(一五〇九)」
- 七四〇 水上杜遷宮行列書写(卷子)「永正六年(一五〇九)頃」
- 七四一 水上宮記(冊子)「永正六年(一五〇九)」
- (9) 愛知県史編さん委員会編『愛知県史 資料編10 中世3』愛知県 平成二十一年三月三十一日発行 所収。
- 一九六〇 織田信長判物 徳川美術館所蔵文書
- 一九七二 織田信長判物 妙心寺光国院所蔵文書
- (10) 愛知県史編さん委員会編『愛知県史 資料編10 中世3』愛知県 平成二十一年三月三十一日発行。
- 七三九 水上杜遷宮祝詞写 久米家文書
- (11) 『知多郡史』上巻 愛知県郷土資料刊行会 昭和四十六年九月二十日復刻刊行。
- (12) 兵藤裕己校注『太平記』(五) 岩波書店 二〇一六年四月十五日発行。
- (13) 『尾陽雜記』愛知県郷土資料刊行会 昭和七年九月一日発行。昭和五十二年二月十日復刻刊行。
- (14) 愛知県史編さん委員会編『愛知県史 資料編14 中世・織豊』愛知県 平成二十六年三月三十一日発行。
- 一五 久目五十代嗣子後裔系譜
- (15) 奥野高広・岩沢愿彦校注『角川文庫 信長公記』角川書店 昭和四十四年十一月二十日発行
- (16) 愛知県史編さん委員会編『愛知県史 資料編10 中世3』愛知県 平成二十一年三月三十一日発行。
- 二二五四 今川義元判物写 土佐国蘆簡集殘篇
- (17) 愛知県史編さん委員会編『愛知県史 資料編11 織豊1』愛知県 平成十五年三月三十一日発行。
- 一六 今川氏真感状写 鵜殿系図伝巻之一
- (18) 愛知県史編さん委員会編『愛知県史 資料編14 中世・織豊』愛知県 平成二十六年三月三十一日発行 所収。
- (19) 前掲(16) 参照。
- (20) 愛知県史編さん委員会編『愛知県史 資料編10 中世3』愛知県 平成二十一年三月三十一日発行。
- 二二五七 今川義元感状写 松平奥平家古文書写
- (21) 愛知県史編さん委員会編『愛知県史 資料編10 中世3』愛知県 平成二十一年三月三十一日発行。
- 二二五八 今川義元感状写 浅羽本系図

(22) 愛知県史編さん委員会編『愛知県史 資料編11 織豊1』愛知県 平成十五年三月三十一日発行。

一六 今川氏真感状写 鵜殿系図伝巻之一

(23) 愛知県史編さん委員会編『愛知県史 資料編11 織豊1』愛知県 平成十五年三月三十一日発行。

一四 今川氏真判物 岡部文書

二七 今川氏真判物写 土佐国蘆簡集残篇三

(24) 『紹巴富士見道記』(渡辺静子・西沢正史編／高橋良雄・白井忠功監修『中世日記紀行文 学全評釈集成』第七巻 勉誠出版 平成十六年十二月三十日発行。)

(25) 『名古屋叢書続編 第三巻 寛文村々覚書(下) 地方古義』名古屋市教育委員会 昭和四十一年九月三十日発行。

(26) 『名古屋叢書続編 第八巻 尾張洵行記(五)』名古屋市教育委員会 昭和四十四年三月三十一日発行。

(27) 『名古屋市蓬左文庫蔵 張州雜志』第一巻 愛知県郷土資料刊行会 昭和五十年六月二十八日発行。

(28) 愛知県史編さん委員会編『愛知県史 資料編11 織豊1』愛知県 平成十五年三月三十一日発行。

七 今川義元書状写 別本土林証文

(29) 五十嵐正也「水野十郎左衛門尉について」(刈谷市歴史博物館 研究紀要』第一号 刈谷市歴史博物館 令和三年三月三十一日発行。)

(30) 寛政譜では「正春」と表記するが、「今の呈譜大膳正忠に作る。」と併記されているため、「今の呈譜」上の名を括弧書きで記す。後の当主も同様とする。

(31) 愛知県史編さん委員会編『愛知県史 資料編12 織豊2』愛知県 平成十九年三月三十一日発行。

一〇四〇 織田信雄分限帳

(32) 黒坂勝美編輯『新訂増補國史大系 徳川實紀』第一篇 吉川弘文館 昭和四年十月二十五日第一刷発行。

(33) 名古屋市教育委員会文化財保護室編『名古屋市文化財調査報告117 埋蔵文化財調査報告書100 国史跡 大高城 附 丸根砦 鷺津砦』名古屋市教育委員会 二〇二四年三月二十九日発行。

(34) 田中重策編輯『尾張國知多郡誌』久松與助 明治二十六年七月十日発行。(『尾張國知多郡誌』船橋武志 昭和六十二年五月一日復刻版発行。)

(35) 黒坂勝美編輯『新訂増補國史大系 徳川實紀』第一篇 吉川弘文館 昭和四年十月二十五日第一刷発行。

(36) 斎木一馬・岡山泰四・相良亨校注『日本思想体系26 三河物語 葉隠』岩波書店 一九七四年六月二十五日発行。

(37) 全国東照宮連合会編『披沙揀金―徳川家康公逸話集―』続群書類聚完成会 平成九年十月十七日発行。

(38) 岐阜県編『岐阜県史 史料編 古代・中世四』岐阜県 一九七三年発行 所収。

(39) 原史彦(「史料紹介」和光山天沢院長福寺所蔵の桶狭間合戦関係資料)(名古屋城調査研究センター編『研究紀要』第3号 名古屋城調査研究センター 令和四年三月三十一日発行。)

(40) 愛知県史編さん委員会編『愛知県史 資料編10 中世3』愛知県 平成二十一年三月三十一日発行。

二二四二 今川義元伝馬手形写

(41) 『静岡県史 資料編7 中世三』静岡県 平成六年三月二十五日発行。

二六八三 今川義元定書写 松林寺文書○竜洋町川袋

ただし、「○本文書は検討の余地がある。なお、『静岡県史料』第三輯所載青木文書に

同文のものがある。」との記載がある。

(42) 前掲註(15) 参照。

(43) 『奥平家傳記』(大島明秀「奥平神社蔵」奥平家傳記)について「中津市歴史博物館編『中津歴史博物館 研究叢書』1 中津市歴史博物館 令和六年三月発行。」

(44) 愛知県史編さん委員会編『愛知県史 資料編11 織豊1』愛知県 平成十五年三月三十一日発行。

一四 今川氏真判物 岡部文書

二七 今川氏真判物写 土佐国蘆簡集殘篇二

(45) 愛知県史編さん委員会編『愛知県史 資料編11 織豊1』愛知県 平成十五年三月三十一日発行。

一六 今川氏真感状写 鶴殿系図伝巻之一

(46) 藤井尚夫「桶狭間の仕掛け人は信長だった!」(『歴史群像』十学習研究社平成五年)

(47) 千田嘉博「新修名古屋市史 第二巻」第六章第五節「城館が語る戦国の名古屋」名古屋 平成一〇年三月三十一日発行。

(48) 高田徹「桶狭間合戦時の織田氏陣城」(『中世城郭研究』第14号 中世城郭研究会 二〇〇〇年七月三〇日発行。)

(49) 榊原邦彦『桶廻間合戦研究』中日出版社 平成二十七年十月二十一日発行。

(50) 徳川林政史研究所蔵。旧蓬左一二九―五三。

(51) 名古屋市蓬左文庫蔵。図二二四。一三五・八厘×一一二厘。

(52) 名古屋市蓬左文庫蔵。図二二五。二〇一厘×一九〇・二厘。

(53) 名古屋市蓬左文庫蔵。図三六九。一三五・七厘×一二二・二厘。

(54) 愛知県史編さん委員会編『愛知県史 資料編14 中世・織豊』愛知県 平成二十六年三月三十一日発行。

二 信長記 首巻 天理大学附属天理図書館

(55) 前掲(45) 参照。

(56) 五十嵐正也「織豊期刈谷水野家・緒川水野家の政治的動向について水野信元・忠重期の緒川領支配を中心に」(『刈谷市歴史博物館 研究紀要』第四号 刈谷市歴史博物館 令和六年三月三十一日発行。)

追記

本稿執筆にあたり、高田徹氏より資料の提供を受け、千田嘉博氏からは貴重な助言をいただいた。また、桶狭間長福寺御住職の小山昌純氏には花井備中守像の調査閲覧の便をはかっていただき、徳川林政史研究所の藤田英昭氏には史料閲覧の便宜をはかっていただいた。末筆ながら厚く御礼を申し上げる次第である。

なお、大高城史については、名古屋市教育局・深谷淳氏による『史跡大高城跡附丸根砦跡 鷲津砦跡 保存活用計画』(仮称)での記述がある。本稿成稿時、同書は未刊であるため、発行年は前後するが、同書内容は本稿より先行している事を付記する。

また、本稿脱稿後に千田嘉博氏より千田嘉博・平山優著『戦国時代を変えた合戦と城―桶狭間合戦から大坂の陣まで―』(朝日新聞出版 二〇二四年十月三十日発行。)を頂戴した。同書では千田氏により改めて桶狭間合戦時における正光寺砦・氷上砦の存在を否定されている他、大高城を経由した海上輸送による鳴海城への兵糧入の可能性を指摘されている。先行研究として追記する次第である。

高田徹氏からは、同じく脱稿後に正光寺砦の地籍図からの復元を試みた丸井国治氏の論考「正光寺砦・失われた大高城の付城」(『愛城研報告』第19号 愛知中世城郭研究会 二〇一五年八月発行。)の存在をご

《Title》

A verification study of the military exploits of Matsudaira Motoyasu; later known as Tokugawa Ieyasu, when providing logistic service to Ōdaka Castle during the Siege of Marune operation

《Keyword》

Ōdaka Castle, Narumi Castle, Washizu Fort, Shōkōji Fort, Hikamiyama Fort, Kanie Castle, Hanai Bicchūnokami, Kume priest family of Hikami Anego Shrine, Mizuno Daizen family, Mizuno Masanaga, Oda Nobunaga, Hattori Sakyōnoshin, *Mikawamonogatari*; History books of Matsudaira clan and Tokugawa clan by Ōkubo Tadataka, *Shinchōkōki*; Biographical documents on Oda Nobunaga, *Chōyakyūbunhōkō*; Related documents about Tokugawa Ieyasu and Matsudaira Family compiled by Edo Shogunate, *Kansei-Chōshūshokafu*; Genealogy of military families compiled by Edo Shogunate in 18th'C, *Kan'ei-Shokakeifuden*; Genealogy of military families compiled by Edo Shogunate in 17th'C, *Tokugawajikki*; Official history book compiled by Edo Shogunate, *Jōha-Fujimidōki*; Travelogue by Satomura Jōha, the Renga poet master

表 1 『朝野舊聞褒貶』所載文献における大高城兵糧入記事・丸根砦攻め記事一覧

書誌名	成立年	兵糧入年	丸根砦攻め年	丸根入時元康年號	元康・軍勢	斥候（大字は兵糧入主張者）もしくは参加者	新入兵糧	おとり記述	他武功	元康評価
				松永時元康年號	従軍人数	丸根砦攻めの参加者			大高城撤退	
1 三河物語	17世紀前半	永禄元年	十七歳			【内藤甚五左・四郎左・杉浦八郎】【鳥井四郎左衛門・内藤甚五左衛門・内藤四郎左衛門尉・石川十郎左衛門・杉浦藤次郎・杉浦八郎五郎】				「大高ノ兵糧入レト申テ御大事也」
2 戸田本三河記	寛永年間（1624～44）頃	永禄二年	十八歳		千騎計	丸根攻め、松平善次郎・寛文蔵討死。	鳥居四郎左衛門・内藤甚五左衛門・内藤四郎左衛門・石川十郎左衛門・杉浦藤次郎・杉浦八郎五郎			小川木野四郎左衛門より浅井六之助が派遣され、撤退を促される。元康、浅井より知行を求められ渋々承知する。
3 成功記	17世紀前半	永禄二年	十八歳		千騎計	鳥居四郎左衛門・内藤甚五左衛門・内藤四郎左衛門・石川十郎左衛門・杉浦藤次郎・杉浦八郎五郎	丸根攻め。			
4 信長記	17世紀前半	永禄三年				「彼凶徒等終夜大高城へ兵糧入レハノミナラス 今朝驚津 丸根岡城ニテ兵共皆ツカシヌヘシ」				
5 増補信長記	17世紀前半	永禄二年				鳥井四郎左衛門・内藤甚五左衛門・内藤四郎左衛門・石川十郎左衛門・杉浦次郎・杉浦八郎五郎	「此敵へ大高城へ兵糧ヲ入レ 又今朝へ驚津 丸根岡城ノ合戦ニ精ヲ盡シ頼難辛シテツカシ果タル人数ナレハ」			「後世ニ至テ大高ノ兵糧入レト称セリ」
6 形原松平記	寛永18年（1641）	永禄三年						今川義元討死の日の夜に大高城撤退。		
7 御年譜	17世紀前～中頃	永禄三年						木野信元より義元討死を告げられる。月の出を待って撤退。		
8 御年譜附尾	17世紀前～中頃	永禄二年	十八歳		千餘騎			義元の死を確認するまで撤退せず。		
9 松平物語	17世紀中頃	永禄三年						元康の臣・浅井六之助を信長勢の物見に遣わす。信長方内で意を通じる梶川平七と行き会い、信長の太高攻め評定の情報を経て帰還。		
10 紀年録	17世紀中頃	永禄二年				鳥居四郎左衛門・石川十郎左衛門				「元康公御初陣也」
11 家忠日記増補	17世紀中～後期頃	永禄三年						信元の使者・浅井六之助を嚮導として、月の出を待って撤退。浅井に恩賞の地を約束する。		
12 玉拾集	延宝2年（1674）	永禄二年					幸部攻め			
13 武徳咄聞書	延宝8年（1680）	永禄二年四月九日	十八歳		計6千人	先手（松平左馬介親後・酒井興四郎正親・石川興七郎数正）四千・家康遣兵八百餘騎・兵糧小荷駄千二百駄				
14 武徳大成記	貞享3年（1686）	永禄二年	十有八歳		千騎	鳥居四郎左衛門・内藤甚五左衛門善致・内藤四郎左衛門正成・石川十郎左衛門・杉浦藤次郎時勝・杉浦八郎五郎勝吉		寺部・梅が坪攻め		「大高の兵糧入」 「御手桶初の高名」
15 關野清安聞書	17世紀	永禄元年	十七歳			丸根攻め、石川日向守家成指揮三部軍（正兵・勝兵・鷹下護衛）。	数百石	寺部・梅坪攻め	清水権介、敵兵追撃の武功	「大神君武略ノ始也」
16 松平記	17世紀	永禄三年				鳥井四郎左衛門・内藤甚五左衛門・内藤四郎左衛門・石川十郎左衛門・杉浦藤次郎・杉浦八郎五郎				「大高の兵糧入と申て御一太変なり」
17 三河記	17世紀	永禄二年四月				鳥居四郎左衛門・石川十郎左衛門・杉浦八郎				「元康若大將にて無双の手からなり」
18 官本三河記	17世紀	永禄二年	十八歳			鳥井四郎左衛門・内藤甚五左衛門・杉浦四郎左衛門・石川十郎左衛門・杉原藤次郎・杉浦八郎五郎		幸邊・梅坪攻め		「難為若年智勇兼備給へタリト諸人舌ヲソ振ヒケル」
		永禄三年五月						闇夜御雨続きの中を撤退。浅井（六之助）を道案内とし、駒馬十騎に松明を持たせ目印とする。		「初陣」

書誌名	成立年	兵糧人年	元康軍勢	斥候（太字は兵糧人主張者）もしくは参加者	納入兵糧	おとり記述	他武功	元康評価
		丸根普攻め年	元康軍勢 （参取時元康年譜）					
19 伊東法御物語	17世紀	弘治三年四月十日 未明		丸根普攻めの参加者		寺邊・梅坪攻め	「大高の兵糧人」	「初ての御手立」
20 新撰信長記	17世紀	永禄三年五月十八日未明	三千餘騎	丸根攻め、石川伯耆守・天野指胤。	義元の死を確認するまで撤退せず。小川（木野）四郎左衛門より義元死を伝えられ、5/20撤退。			
21 治世元記	17世紀	永禄二年		鳥居四郎左衛門・石川十郎左衛門・杉浦藤次郎・杉浦八郎五郎（「龜通」）				
22 桶狭間合戦記	17世紀後半頃か	永禄三年五月十九日	十八歳 千餘兵	丸根攻め。元康、大高龍城。 鳥居四郎左衛門・内藤甚五左衛門・内藤重一郎・石川左衛門・杉浦藤次郎・杉浦八郎五郎 鷲津・丸根攻め。	義元の死を確認するまで撤退せず。月の出を待ち撤退。浅井に松明を持たせて道案内させる。			
23 創業記	17世紀後半頃か	永禄三年五月十九日			5/19水野下野守より義元討死を告げられる。水野四郎左衛門の使者・浅井六之助からも義元討死を告げられる。平岩権太夫・平岩弥之助・本多久左衛門を義元本陣へ遣わせて義元討死を確認して撤退する。			
24 近代諸士傳略	元禄14年（1701）			寛清左衛門正則、大高城で討死。	義元の死を確認するまで撤退せず。			
25 總見記	正徳4年（1714）	永禄三年		松平善兵衛、棒山にて討死。松平摂津守・松平兵部・松平次右衛門、所々で討死。松平上野介、義元本陣で討死。				
26 岩淵夜話別集	享保元年（1716）	永禄三年		御先（松平左馬助・酒井與四郎・石川與七郎）四千餘・家康旗本八百餘・兵糧小荷駄千式自走。	水野下野守より使者を遣わされて撤退を促される。二之丸より本丸へ移進。浅井六之助・小栗大六を先導として岡崎帰還。一揆勢の森臣を本多百助が射殺にて追い払う。			
27 落穂集	享保12年（1727）	永禄二年四月九日 壬の刻			寺部・梅ヶ野攻め		「大高の兵糧人と申て御名案の二ツ」	
		永禄三年五月十九日未明			義元の死を確認するまで撤退せず。水野下野守信元より浅井六之助が遣わされて撤退を勧告。浅井を捕虜とし、岡崎城留守居・鳥居伊賀守他、三浦・上野・飯尾などからの報告によって義元討死を確認。二之丸より本丸へ移進。浅井を道案内とし、浅井の尽力により一揆勢の襲撃をかわす。			「[仕年ニ至ラヘ希世ノ英傑タルヘン]」
28 武徳編年集成	元文5年（1740）	永禄二年三月	十有八歳 千餘騎	鳥居四郎左衛門信光・内藤甚五左衛門義政・内藤四郎左衛門正成・石川十郎左衛門・杉浦藤次郎時勝・杉浦八郎五郎鎮定	月の出を待つて撤退。浅井六之助を嚮導とし馬上に松明を掲げさせ、恩賞を約束。酒井将監忠尚・酒井左衛門尉忠次・松井松平監物安次供奉する。元康親兵五十騎。後殿本多百助信俊等三十騎にて地下入襲撃を撃退。			
29 續明良洪範	18世紀頃	永禄三年		元康、大高城在城。				
30 岡崎古記	18世紀頃	永禄三年			松平監物信康の家来・浅井六之助より義元討死を知らされる。			
31 三河記大全	未詳	永禄三年	千餘騎	鳥井四郎左衛門・内藤甚五左衛門・杉浦四郎左衛門・石川重良左衛門・杉浦藤次郎・杉浦八郎五郎	夜に入り浅井（六之助）を道案内として撤退。			
32 三河記摘要	未詳	永禄三年五月十八日		丸根攻め、松平善四郎・高力新九郎・寛文殿討死。	三千徒		「大高の兵糧人」	
33 酒井本三河記	未詳	永禄三年五月			義元の死を確認するまで撤退せず。水野下野守信元より浅井六之助が派遣されて撤退を勧告される。小栗大六を岡崎へ遣わせて義元討死を確認して撤退。			
34 三河国郡志	未詳	永禄三年			松平内膳家来・浅井六之助及び内膳子・監物、義元討死を知らせたことで大高城撤退。			

書誌名	成立年	兵糧入年		元康軍勢		斥候（大宇は兵糧入主張者）もしくは参加者	細入兵糧	おとり記述	他武功	元康評価
		丸根攻め年	同前入元康年数	丸根攻め年	従軍人数					
35 大永慶長年間略譜	未詳	永禄二年	十八歳	千餘騎	鳥居四郎左衛門・内藤基五左衛門・内藤四郎左衛門・石川十郎左衛門・杉浦藤二郎・杉浦八郎五郎	百石				
36 尾張古戦場記	未詳	永禄二年		一千騎	鳥井四郎左衛門・内藤基五左衛門・内藤四郎左衛門・石川十郎左衛門・杉浦次郎・杉浦八郎五郎					「大高ノ兵糧入レトテ三河衆後迄申傳タリ」
37 明應至永禄雜記	未詳	永禄元年	御年十七		鳥井四郎左衛門・内藤基五左衛門・内藤四郎左衛門・石川十郎左衛門・杉浦藤次郎・杉浦八郎五郎					「是權現様御手柄の初なり」
38 天元年記録	未詳	永禄二年	十八歳		鳥井四郎左衛門・内藤基五左衛門・内藤四郎左衛門・石川十郎左衛門・杉浦藤次郎（「御出馬御供」）			菅沼久助、「大高兵糧入」の感状有り。松本善四郎・寛又蔵・松平次郎右衛門古重の三男巖若之助討死。「丸根之城 佐久間大守を追捕」		「元康大高兵糧入と甲州尾州にて害たるなり」
39 小栗家日記	未詳	永禄二年			鷲津・丸根攻め。	義元の死を確認するまで撤退せず。永野下野守より浅井六之助を使者として撤退を勧告される。信長方内で意を通じる梶川平七からの密告により信長の				
40 奥平家傳記	未詳	永禄二年二月			鳥居四郎左衛門・小栗二右衛門				奥平貞勝、兵糧入時武功。今川義元より感状。	
41 奥平家系	未詳	永禄二年三月							奥平貞勝、兵糧入時武功。今川義元より感状。	
42 前橋酒井家舊藏聞書	未詳	弘治三年四月十日未明	十六歳				寺部・梅坪・原瀬攻め			
43 徳川軍功記	未詳	永禄三年五月十七日					夜陰大雨撤退時、天久保新八郎忠俊、隊列を制御して供奉。			
44 御先祖記	未詳	永禄三年			元康、大高籠城。鷲津・丸根攻め。	元康の臣・浅井六之助を信長勢の物見に遣わす。信長方内で意を通じる梶川平七と行き会い信長の大高攻め評定の情報を経て帰還するも、今川の家老からの状を待つて5/20夜半に雨天の中撤退。				
45 西尾古老傳	未詳	永禄三年				浅井六之助を案内として猿投山下経由で岡崎へ帰還。				

表2 『寛永諸家系図傳』・『寛政重修諸家譜』における桶狭間合戦記事一覧

番号	寛永譜	名前	寛政譜	寛永譜	永禄2年	寛政譜	寛永譜	永禄3年	寛政譜	その他	寛政譜
【松平方】											
1		青山忠門						5月、今川義元に属従。			
2		青山重成						今川義元に兄・忠門と共に供奉。			
3		青山忠重						丸根啓攻め時、供奉。			
4		青山正時						大高城に供奉。			
5		湯美友勝						義元討死の後、元康に岡崎掃遠を献言。服部政光とともに兵糧米を献上して、御紋金具御印形を拝領。			
6		阿部正勝						5月、旗本を討撃。譜代諸士御印等の賀を請う。			
7		阿倍忠政						5月、大高城散退・岡崎掃遠に供奉。右瀬十八町合戦で武功。			
8		石川家成						棒山（丸根）の城攻め・石瀬合戦時、先手を務める。			
9		今村勝長						5月、大高城に供奉。			
10		大久保忠俊						5月、大高城散退・岡崎掃遠時に行軍指揮。			
11		大久保忠政						龍驤出馬に供奉。父・忠俊と共に殿を勤める。			
12		奥平貞勝			3月、大高城兵糧入に従う。						
13		奥平貞能									
14		小栗某（又市）			5月、大高城兵糧入時、織田勢への押となる。						
15		寛重忠						5月、丸根啓攻め時、供奉。			
16		寛正則						5月、丸根啓攻め時、討死。			
17		寛正直						5月、丸根啓攻め時、供奉。			
18		斎藤某（宗三郎）						5月、丸根啓攻め時、供奉。歩行頭を勤める。			
19		高力重正			5月、大高城で討死。			5月18日、大高城で討死。			
20		高力清長			5月、大高合戦で武功。首一級討ち取り。			5月18日、大高合戦で武功。首一つ討ち取り。			
21		酒井正親			小僧駄奉行として大高城入城。鷲津・丸根啓攻めに供奉。						
22		柳原忠政						5月、丸根啓攻め時、武功。			
23		柳原正吉						5月、丸根啓攻め時、脇從。柳原忠直と共に櫓を合わす。			
24		杉浦勝吉			大高城兵糧入時、敵の形勢を見て、兵糧入を建言。小僧駄師の先を進む。						
25		高木廣正			尾州小河合戦で武功。			丸根啓攻め時、供奉。右瀬合戦で武功。			
26		島居忠吉			なし			5月、丸根啓攻め時、三軍の内、供奉の列に属す。			
27		島居元忠			桶狭間合戦に出陣。			5月、大高城入城時、従軍。			
28		内藤某（甚藏）								永禄元年、大高城兵糧入に供奉。	
29		内藤信成						5月、丸根啓攻め時、三軍の内、酒井忠次と共に護衛の列に属す。			
30		内藤正成								永禄元年、大高城兵糧入に供奉。	
31		成瀬某（鈴木/左衛門）			3月、大高城兵糧入に従軍。						
32		榑居某（半之丞）						5月、丸根啓攻め時、供奉。右瀬合戦で武功。			
33		平岩親吉			大高城兵糧入時、御馬廻りに伺候。			5月、丸根啓攻め時、三軍の内、守衛の列に属す。			
34		本多信俊			大高城散退時に武功。			大高城散退時に武功。			
35		本多忠勝			大高城に供奉。			大高城に供奉。			
36		本多忠俊						右瀬合戦で武功。			
37		松平景忠			松平（五井）景忠			5月、丸根啓攻め時、武功。			
38		松平某（源七郎）			松平（長沢）親廣			5月19日、桶狭間合戦に赴く。政忠と共に供奉。			
39		松平なし			松平（長沢）忠良			桶狭間合戦で兄・政忠と共に討死。			
40		松平某（傳市郎）			松平（能見）某（傳市郎）			5月18日、房山（丸根）の城攻め時、討死。			
41		松平利長			松平（藤井）利長			5月、丸根啓攻め時、討死。			
42		松平信一			松平（藤井）信一			5月、丸根啓攻め時、三軍の内、遊軍に属す。・刈屋十八町合戦で武功。			
43		松平某（源七郎）			松平（長沢）政忠			5月19日、桶狭間合戦で討死。			
44		松平正親			松平（大草）正親			5月18日、棒山（丸根）の城攻めに先駆けして討死。			
45		松平宗次			松平（宮石）宗次			5月、元康の使者として今川義元本陣に赴き討死。			
46		松平好景			松平（深津）好景			5月、大高城散退時、防衛。家人・三浦平太郎某討死。			
47		渡邊貞綱			渡邊貞綱			大高城散退時、供奉。			

